

卷頭言

お題目の信行は人生修行である

石川教張
(現代宗教研究所所長)

一、教化研究会議と教化学研究

(1)教化研究会議は、単なる会議ではない。教師間の教化交流と教化研究を主題とする研鑽の場であり、信行学の道を共同して求道する教師の信仰の集いである。

それゆえに、話しあいだけに終始せずに、問題提起—教化上の問題点への探検—事例体験の交流—取り組むべき課題の提出—教化策のまとめ—共同教化の内容確認—教化の実践—実践された教化活動の点検—あらたな課題の発見と対応—問題提起、という連続的な積み重ねが重要である。討議から実践への道すじをつねに再確認しておくべきである。

同時に、教師個人にとどまらず教師間のヨコの教化交流と連帯、共同作業（教化センター）を実施すること、宗門の内側や檀信徒の枠内だけに通用する教化上のテクニックにとどまらずに、広く社会一般に通用し、啓発、流布しれるような教化内容を備え、現代社会に提言・警告できる程の社会的な教化実践の方向を打ち出すものでなければならぬ。

(2)教化研究のキーワードは、「法華經・日蓮聖人の教説の信仰化・思想化・生活化」(教)と「現代社会の実態および現代人の意識・要望」(機・時・国)にある。この点を、教師が信仰主体として如何に時代的・社会的にとらえ実行していくか(序)が教化研究の姿勢である。このためには、教化上の各分野の部会制にもとづく教化研究の積み重ねとその体系的まとめとしての教化研究を重視すべきである。

分野別部会の教化研究は、中央教研では七部会(教学部会・寺檀部会・法器養成部会・世代別教化部会・教化伝道ネットワーク部会・社会問題部会・立正平和部会)を設けて取り組まれ、討議から継続的研究、体系づけへのまとめの方向をめざそうとしている。中央及び教区教研に関係する全教師がいすれかの部会メンバーに入つて教化の研究交流と方策のまとめに取り組むよう、部会体制の充実を図っていくことが今後一層要請されよう。

(3)教化研究は、寺院論、僧侶論、教化論、教育論、教団論、社会実践論など、信仰教説をひろめるための教化の体系づけを研究するものである。教研会議は年一回の研究討議を主とし、その積み重ねの上に立つて、一定の段階で部会ごとに「教化」の各論をまとめ、これを発表、提言していく教化研究集会を開いていくことが必要である。

教化研究は、教説の活現、生活化(教)、人間教育(機)、現代教化(時)、国家社会の仏国土化と「日蓮一門」の伝道教団づくり(國)、歴史を担う教師による時代、社会に向かっての教化実践(序・師)を取りまとめ、提示することを目的とする。この五つのKは、「弘法の用心」として示された五義の今日的活用でもある。

(4)教研会議・教化センター・教化研究集会の三点セットは、お題目信仰を社会と生活の中にひろめる運動の土台であり、現代の「大師講」として機能していかねばならない。

二、お題目総弘通運動の展開のために

(1)この運動の創始者は、日蓮聖人である。「日蓮は一闇浮提の内、日本国安房の国東条の郷に始て此の正法を弘通

し始めたり」（新尼御前御返事）。二一世紀初頭の立教開宗七五〇年を当面の目標とする「運動」は、正法・題目教团づくり（職能宗団ではなく信仰教化の共同体としての教団）、広く社会や人間に正法を弘通する実践をめざしている。その目的は、「成仏」という究極的な人間形成にある。仏の正法に随順して生きる人々とその社会国家づくりにある。お題目を唱えることは、仏の正法を信じ、それに従い、仏種を心田に植えて向上し、下種結縁をめざす生き方をすることであるから、世間の不正を折伏し、自分を折伏して「自行の折伏」修行に励み、宗団のあやまちを折伏し、お題目によつて生かされていることに自覚め、真に「仏になる道」を歩むことが「運動」の担い手のあり方である。従つて、「運動」は宗務内局のみが起ことしたものではない。単に何とか運動があつた方がいいとか、「運動」があるから仕方なくやるといったものでもない。日蓮宗の教師として、地涌の菩薩の一分、聖人の門弟たらんとする者は「お題目」を離れては存在しえない。お題目を「私一人」に与えられたという自覚に従つて、「運動」を担つていくことが不可欠である。

(2) 今日、「運動」は低迷している。何をしたらしいのか、という意見がある。一般的にいう「お題目」だけといふ空題目の傾向にある。現場の「運動」の担い手、進め手に対する宗務院のサポート態勢が不充分であること、「運動」の構想・実働的組織態勢と実行手段がはつきりしないこと、宗門運動の名称が変わるだけで中味は旧態依然、建て増し風のけじめのなさがあるため、新しい信仰運動（未信の社会にお題目をひろめる運動、宗団から教団への改革運動、立正安國をめざす平和と幸福のための社会的信仰活動）としての性格づけがされていないこと等が大きな理由としてあげられる。

しかし、最大の理由は、僧侶が「お題目で救われていない」ことではないか。「日蓮が慈悲」も「盲田を開ける功德」を感じ取つていないためにお題目のありがたさ、法華経のすばらしさ、法華経に従つて生きる生き方を身をもつて示していらない所にある。純一に「お題目を唱えること」「唱えるようすすめること」「お題目のありがたさ、大事

さを示すこと」が肝要だ。そこに立って「信行する道場としての寺づくり」（信行会）、「家庭における信行生活づくり」、「社会におけるお題目信仰の普及」に対する教化戦略を練り実行することが必要である。教化戦略としての四つのP——プレゼンテーション（表現）、パフォーマンス（動き）、プロフェッショナル（専門性）、フィロソフィ（理念、信心、教説）をどう具体化するかである。

(3) 伝道教団の構成員、お題目の担い手は、教師、寺庭婦人・寺族、檀信徒であり、有縁の各界の人々である。住職中心主義は限界にある。寺庭婦人、檀信徒を構成員にしていく改善策が必要だ。特に「運動」においては、「信徒が信徒を導く」ことが大切である。日常生活から出発しそれに即した苦悩の体験や救われた体験、お題目を唱えるようすすめ、信行会に来ることがお題目を唱えることであるという信行のすすめ、世代に応じた日常の信行会活動、信行リーダーの育成、お題目を唱える人材づくり、悩みから救われた語りあいが仏道修行であり、「運動」なのだ、といふ姿勢が求められる。

(4) お題目の功德にちがいはない。「但し、此經の心に背いて唱へば其差別有るべきなり」（松野殿御返事）とされる。一般的に釈迦仏（仏）・法華經（法）・日蓮聖人（僧）の三宝と行者と檀那（信徒）の三位一体で唱える題目が日蓮宗の題目である。聖人を本仏として仏・法を捨てた唱題、聖人を離れて仏・法を崇める唱題は三宝受持の唱題とはいはず、日蓮聖人を通した法華經の心に背いた唱題といえる。また、題目を集團の看板や集團の拡大、利益や修行の手段に利用している傾向もある。こうした「空題目」「通題目」の情況の中にある宗門もまた同じ状態にある。お題目の功德とその意義を改めてとらえ直し、お題目で自らも救われ人をも救い、その功德を広く世間の日常生活にしみ通りさせてゆくための心がえと工夫が求められているのではない。

お題目の信行は、私たち一人ひとりの人生における修行である。